

咸臨丸渡米一五〇年を迎えて

塩飽と長崎海軍伝習所

吉田 幸男

嘉永六年（一八五三）、私の先祖の平尾幸藏（塩飽勤番所年番代）は大坂町奉行所より「浦賀において製造の御軍艦鳳凰丸の水主として、塩飽より三〇人を差し出し、一年間勤務させること。船中に居住させその間扶持米を支給し、一年後には手当てをくだされる」との書状を受けとる。塩飽の年番年寄は早速各浦々の年番、庄屋、組頭を集めて島中会議を開き、三〇人の水主を差し出すことに決定した。

一、三〇人の水主は、最初のことであるので島の二十一浦から一人ずつ、残り九人は、泊浦から三人、笠島・高見島・手島よりそれぞれ二人を出すこと。

一、二〇歳より五〇歳までの者を、浦々で選定し、二十一日までに見極めの為、勤番所へ召し連れること。

一、用命があるまでは、一人前一ヶ年分金五両を支給する。

一、浦賀へ行って御用についた時は、右の五両に足して、一人前銀一貫目を支給し、浦賀までの往復の費用はその内から個々に支出すること。

一、幕府から支給される扶持米並びに手当て銀は本人へ渡すこと。

浦賀で行われた海軍伝習のため塩飽より一二九名を送り出している。

鳳凰丸は竜骨、肋骨、外板、甲板で構成された洋式構造船であったが、和船技術も取り入れ、約八ヶ月という驚異的な速さで完成させ



塩飽勤番所

ている。全長約三十六メートル、幅九メートル、深さ約六メートル、木造帆船二本マストのバーク型で備砲は大小あわせて一〇門でわが国最初の洋式軍艦で排水量は五一〇トン国内第一の巨艦であった。

船体は赤、黒のストライプで鳳凰が描かれ、帆には中央横に黒い筋が入っていた。これは幕府軍艦をあらわすもので、後の三角の細長い中黒長旗の元になっていた。ちなみに薩摩藩の軍艦は下黒と呼ばれ帆の下側が黒く塗られていた。

塩飽島は瀬戸内海の最狭水域に位置し、干満の差は四メートル、一時激しい潮流を生むので島の人達は高度な操船術と造船の技をもっていた。

源平合戦の折、源氏は屋島の平家が塩飽海賊衆を味方にしていたので渡海できず、義経は阿波（徳島）にまわり屋島を攻略している。その後、屋島を失った平家は安徳天皇を一時塩飽島に避難させ、多くの女官や仏像を塩飽に残し西へ落ちていった。

天正五年（一五七七）信長は、安芸門徒の船団を塩飽一族を味方につけて撃滅し戦勝した。これにより塩飽一族は信長より「天下布武」の朱印状を買っている。

豊臣秀吉の島津攻めの時には九州へ兵糧、武器を輸送。小田原攻めの時にも兵糧を輸送し、朝鮮出兵時には巨船三十二隻、水主六五〇名を参加させている。この数は大名と匹敵する。秀吉は水主六五〇人に塩飽の地を与える朱印状を出している。

その後村上、九鬼水軍等すべての水軍が滅亡してゆくなかで塩飽海賊衆だけは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え、最後には幕府唯一の御用水軍として活躍している。それ故に塩飽の六五〇名は江戸幕府より直接朱印状を得、人名と呼ばれ特別な地位を享受している。

江戸時代、島原の乱には輸送船五十九隻出し、長崎奉行下向時には大阪より小倉まで送り、朝鮮使節には大阪と京に川船を出している。新井白石は「塩飽船完堅精好、他州視るべきにあらずその賀使郷民また淳朴」

と絶賛している。更に塩飽船は金比羅大権現の旗を掲げ、金比羅信仰を全国に広めている。

安政二年(一八五五)長崎での海軍伝習が開始され、觀光丸の乗り組む水主について長崎奉行荒尾石見守は、「船工・水主の儀は、兼ねてご沙汰の通り、讃州塩飽島水主当地へ呼び下し候儀、大坂町奉行へ申し談じ置き候故、この際三十人程早々に差し下し候様」と塩飽からの水主を待ち望んでいる。

伝習所の長である水井岩之丞尚志は「海軍伝習に充てるべき水主に於いては、航海に熟練の名ある水主を使用いたしたし、水主は塩飽島の地にて取り計らい……」「塩飽水主たちは休みの日にも漁猟手稼ぎなどをせず、伝習稽古に励み、帆柱の昇り降りなど危なき技前を常とし、大砲の取り回し手伝いなど日々余暇これなく……」これらによっても塩飽水主の評価が高かったことが知れる。

長崎海軍伝習所に参加した塩飽水主の人数は以下の通りである。

- 安政二年 九月三〇日 十二月 十五人
- 安政三年 四月一〇日 九月 一〇人 十一月三〇日 三〇人
- 安政四年 二月三〇日 四月 三十五人 八月 三〇人
- 安政五年 八月三〇日 〇安政六年 二月二〇日 計 二四〇人

安政五年六月、長崎よりの手紙によれば長崎でコレラが大流行し、塩飽の水夫が二人死亡し、四人が病気の安静のため帰島している。坂本竜馬で有名な海援隊いろは丸と紀州藩船明光丸が塩飽の海で衝突するが、双方の船長は共に塩飽の人であった。

咸臨丸渡米の折、全乗組員九十六名中、塩飽水主三十五名、長男を除き次、三男から選り、水杯して別れを告げ、死を覚悟しての出発であった。戊辰戦争では多くの塩飽水主が幕府軍艦に乗り組んで、戦死している。我家の先祖、平尾幸蔵の次男、宮三郎は最年少の十六才で咸臨丸に乗り組み、小笠原探検に参加したものの戊辰戦争にて戦死している。

西周(にし・あまね)は渡欧の折に咸臨丸に乗り塩飽に寄港し、島の様子を次のように書きとめている。

「咸臨丸のいたるや、島民は端艇に乗りて群り来たり、母は子を認め、婿は夫を認めて歡呼相応ず、その喜び知るべし」

(咸臨丸子孫の会)

風信

○長崎の先人がたは「長崎は桜見物よりも楠若葉の萌え出る新緑の景色が良らしい」と言われている。たしかに私も風頭山(かざがしら)を取り囲む楠の若葉には心ひかれる。

○四月十八日は旧暦三月二十三日で、長崎ランタン・フェスティバルの祭神媽祖様の誕生日であり、昔より崇福寺媽祖堂で媽祖祭がある。今年も潘会長より御招待があり、本会より有志二十名と共に参列。式後の宴席には山羊・豚・馬手貝等の珍しい中国家庭料理があった。中華人民共和国長崎総領事も出席しておられた。

○本会主催の月二回開催の「古文書を読む会」五月より初級者講習を開催、その第二回を五月十九日(火)より始めた。六月は二日(火)と十九日(金)午前二〇時半より(会費不要、自由参加)

○五月二十三日(土)午後二時より本会越中理事長の長崎学文化史講座「長崎夏の行事と食文化」開催(会場・長崎市民会館視聴覚室・参加費不要)。主催・長崎純心大学博物館、後援・本会、自由参加。

○長崎県立図書館郷土課長・副館長を経て県文化振興課参事として地方史研究に多大の貢献を残された本馬貞夫先生。今回その退職記念として「貿易都市長崎の研究」を発刊された。同書のうち長崎貿易史論について、特に今後の長崎史研究の上に大いに参考となる論考が多く記されていた。(九州大学出版会刊、六、二〇〇円)

○長崎県北松浦郡江迎町の酒造家本陣・創立三百二十年を記念し「平戸街道江迎本陣誌」を出版、同本陣の当主で山下家十二代山下庄左衛門氏より同誌を戴いた。江迎町は旧平戸松浦藩領であり藩主と山下家との御交誼は深く松浦藩関係の資料も多く記載されており、地方史研究資料としても大いに参考になった。(潜龍酒造KK刊)

○季刊「楽」三号拝受、前段は「長崎検番」、後段は生活詩を主題に「命をつなぐ種」であった。私は前段の八木拓也さん撮影の「昔、なつかしい芸子衆のおもかげ」に心ひかれた。(イー・ズワックス刊、二、〇五〇円)

○前号に記した「我が国最初の花まつり」は推古天皇十四年(六〇六)でした。



長崎歴史文化協会 研究会

TEL 八二一-一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F